

『真字寂寞草』の片仮名「本文」について

柴田雅生*

一 はじめに

真名本と呼ばれる本の存在は早くから注目されてきた。⁽¹⁾「あて字・新造字・異体字を用い、国訓の異様なものを多く含む⁽²⁾」ことや「擬古的、戯作的⁽³⁾」な書き直しが目をひいたと考えられる。

「真名本」という語そのものの存在は決して早くはないが、「真名書き」の語が室町期に見えることから、⁽⁴⁾いわゆる真名本の残存状況と大きく矛盾しないと言っただろう。

現存する代表的な真名本を作品別に掲げると次のようになる。

現存する代表的な真名本（作品のおおよその成立年代順、諸本名は通称で示した）

- 伊勢物語 ・ 真名伊勢物語（寛永二十年（一六四三）刊）
- ・ 旧本伊勢物語（建部綾足、明和六年（一七六九）

刊）

○古今和歌集 ・ 古今集真名字解（菊池春林、安永三年（一七七

四）刊）

○三宝絵詞

- ・ 前田本三宝絵（前田育徳会尊経閣文庫蔵、正徳五年（一七一五）写、寛喜二年（一二三〇）書写識語の醍醐寺釈迦院本（現在所在不明）を臨模したもの）

○方丈記

- ・ 真字本方丈記（吉沢義則旧蔵・武庫川女子大蔵、江戸時代写か）

○平家物語

- ・ 熱田本平家物語（熱田神社旧蔵・前田育徳会尊経閣文庫蔵、室町時代写）
- ・ 平松家本平家物語（京都大学図書館蔵、室町時代

写）

○徒然草

- ・ 真字寂寞草（岡西惟中、元禄二年（一六八九）刊）

○曾我物語 ・ 真名本曾我物語（妙本寺蔵、天文十五年（一五四六）写）

現存する真名本はおおよそ室町時代ごろからのものと言える。これらのほかにも、享保二年（一七一七）跋の今井似閑『万葉緯』などがあるが、真名本が最古態を示すとされる『曾我物語』や、本文系統分類において一つの類をなす『伊勢物語』を除いて、真名本は本文としてあまり重要視されていない。真名本は作品そのものというよりも、やはりその書き方のありようが特徴であって、しかも既に存在した「仮名で書かれた本（仮名本）」について、本文はそのままに、その表記を改めたものである

という認識が一般的であったろうから、本文そのものを扱うには必ずしも適当ではないと考えられたからだろう。

また、真名本はその漢字表記と対応するよみの関係を正確に把握したい面が多々存在する。山田俊雄氏が「変体漢文式の場合、多くは傍訓や返り点を有しているが、それら訓点を除くと、今日正確な読解にたえるものはまれ」とするのはその一例である。前述したように真名本に対する興味関心は早くから見られたが、研究の進展は未だしの感が強い。専著と言えるのは高橋忠彦・高橋久子『真名本伊勢物語 本文と索引』（平成十二年三月、新典社）ぐらいのもので、個々の資料の研究だけでなく、真名本全般を見渡した研究も少ない状況が続いていると言えよう。

二 問題の所在

ところで、真名本の特徴について語るとき、右に挙げた変体漢文の系統と、万葉仮名の系統に大きく分けられるということが言われる。ただ、この両者はむしろ混在することが多く、その混在のさまは資料によってまちまちであり、個別的に考える必要がある。また、江戸時代に刊行されるような真名本には万葉集研究の成果を反映したものが少なくなく、その結果、室町時代までのものとは用字法が異なるという指摘もされている。

室町時代のものとは江戸時代のものとの違いという視点で先に掲げた代表的な現存真名本を眺めると、寛永二十年刊の『真名伊勢物語』をはじめとして、江戸時代のものには大半が刊本である。言うまでもなく江戸時代の出版文化隆盛が真名本においても見られるのであるが、併せて江戸時代に版に付された真名本には「総ルビ」（本文部分の漢字のすべてに

対してよみを添えること）とでも言えるくらいに、漢字に対して仮名がびっしりと添えられている状況が見られると言えそうである。

真名本の「真名」とはもちろん漢字の謂であり、「仮名（平仮名／片仮名）」で書かれたものを漢字（真名）表記に仕立てたものという真名本の根本的な部分ではある。だが、改めて考えてみるに、表記を漢字に直したものに「平仮名・片仮名」が付け加えられるのである。漢字表記に変えた段階で真名本としての条件は整ったはずだからである。

いわゆる漢文に対する訓点として仮名を添えたという見方は十分に成り立つだろう。また、これも先述の如く、漢字を用いた特別な書き方に変えた場合に、その書きようでは読みが困難になるのを避けるべく、いわば振り仮名のかたちで加えたということもあるだろう。しかしながら、そうであるならば「総ルビ」である必要はなく、必要最小限の仮名を記すだけで足りたのではないか。事実、漢字に対してほとんど自明と考えられるよみを示す仮名が添えられている箇所が少なくない（いやむしろそれが基本と考えられるような体裁の真名本が多いと言えそうである）。また、真名本は変体漢文式のものだけでなく、万葉仮名式のものも多く、とりわけ江戸時代においてその比率は高まっているようにさえ思われる。形式上のことはともかくも、その内実において訓点と同等のものとは言いがたいと考えられる。

右の疑問に対する有力意見は、注釈書の体裁に則ったという見方であろう。本稿で扱う『真字寂寞草』は注釈書に分類される。今井似閑『万葉緯』をはじめとして、注釈的な姿勢があらわである真名本は珍しくなく、それらはほぼ「総ルビ」のかたちで仮名を添えられている。しかし、これとても、成立当初から「総ルビ」であったとする必然性はない。

寛永二十年版『真名伊勢物語』は『国書総目録』において「物語」に分類され、「注釈」とは扱われていないが、その内実は注釈とも看做しうるものである。西宮一民氏は、『真名伊勢物語』第一段を取り上げた上で、

もし「而」や「有」を訓字とすると、万葉仮名は「遣」「利」「余」があるにすぎず、ほとんどが訓字表記である。これは、仮名文に対して、解釈結果を訓字で表記したもので、古典研究史的に見るべきものである。
〔漢字百科大事典〕「真名」の項

と述べられる。真名本に改めることは注釈的態度とは無縁ではありえないのである。

ところで、『伊勢物語』の真名本諸本を解説した池田亀鑑『伊勢物語に就きての研究 研究篇』において、「総ルビ」ではない真名本が紹介されている。いずれも「振仮名は刊本に比し少い」（桂宮本）「振仮名は甚だ少い」（九条本）と解説するなど、傍訓はまばらであって、「総ルビ」ではないようである。解説に傍訓への言及がない天明本については、大津有一『伊勢物語に就きての研究 補遺・索引・図録篇』の「伊勢物語聚影」において掲げられた図版の範囲（半丁）には傍訓は見当たらない。つまり、あくまで『伊勢物語』で確かめ得た話ではあるが、部分的である場合も含めて、付訓（仮名）を伴わない真名本が存したということである。

このことに関連して、寛永二十年版『真名伊勢物語』は、漢字本文と仮名部分の本文の系統が異なるとの見解が國領麻美氏によって示された。國領氏は『真名伊勢物語』の漢字本文と付訓（仮名）のずれをもとに考

察された結果、

真名本が出来た後に、天福本系の仮名本をもとにして付訓が施された可能性が高いと思われる。

と結論づけられた。そうになると、漢字本文と付訓を単純に結び付けて理解することは危険であることとなる。やはり、真名本は漢字で記されている部分（漢字本文）が中心にあり、それとの関係で仮名の位置づけを把握するよう努める必要がある。

先にも述べたように、真名本の研究は未だしの状態である。それを進めるためには、山田俊雄氏がそれとなく言われるように、まずは個々の真名本の記述を進めるべきではないか。その際、漢字本文とそれに添えられた仮名との対応関係をひとつひとつ具体的に明らかにし、その文献に見出だせる漢字とよみとの対応関係の総体をつかむことから始めたいと思う。

具体的な資料の分析に入る前に、試みに小倉百人一首の真名本の一つである『首書真字百人一首』（岡西惟中序 素軒松菊、元禄八年（一六九五）刊）を閲してみると、通常の本文（角川文庫による）と異なる箇所は次の三箇所留まる。

筑波根乃ツクハネノ從ノ岑落ミミキ 美奈能ミナノ川カハ恋コヒ會積ウヰヰ 而シテ淵土成来フチノツチノナリ（十三番、陽成院）

通常の本文 第五句「ふちとなりぬる」

御垣守ミナモトノ衛士ヱシ之ノ燒火ヒキ乃ハ宵者ヨシ然シテ而シテ日午者ヒルノ減ヘ乍物ツキモノ矣ナリ社ヤシ付倍ツキ（四十九番、大

中臣能宣朝臣）
通常の本文 第三句「よるはもえ」

君之為不^{キミ}有^{カタメ}惜^シ之^ヲ寿^シ 副長 欲^{ホシ}レ得^ル土^チ認^ニ 奴^ヌ流^リ哉^カ (五十番、藤原義孝)

通常の本文 第五句「おもひけるかな」

小倉百人一首の諸本を当たったわけではないのであくまで推定に留まるが、案のごとく少ない。そして当然のことながら、漢字本文とそれに添えられた片仮名はしっかりと対応している。十三番歌の「来」は助動詞連体形「ケル」と対応し、五十番歌の「奴流」は完了の助動詞連体形「ヌル」に対応した借音仮名となっている。四十九番歌の「而」がどのような扱いで添えられたが気になるが、左に付された片仮名と対応させたのであろうか。もとより、韻文という本文の性格も関わることであろうから、漢字本文とかけ離れたよみを片仮名で添えることは考えにくいということなのであろう。

つまり、漢字本文に対して添えられた仮名は不即不離の関係にあったのではないかということである。その関係が「即」に傾くか「離」に近付くかは、文献ごとに、またその箇所ごとに異なることを前提として、以下では『真字寂寞草』について見ていくこととする。

なお、本稿の標題において、「片仮名本文」とせずに「本文」のみを括弧付きで示したのは、これまで述べ来たように、片仮名で添えられた部分が漢字本文に対応するよみを示すと言い得るのかを疑問視したためである。

三 『真字寂寞草』の片仮名「本文」——烏丸本と対比して——

本稿で中心に据える真名本は岡西惟中『真字寂寞草』である。元禄二年（一六八九）刊の、真名によるものとしては唯一の徒然草注釈書とさ

れている。その注釈態度に関しては、

『徒然草』の全文を漢字に直し、その右に片仮名を付し、頭注として難解な語に注を施している。惟中の漢学に対する知識の程が知られるが銜学的な傾向も見られる。⁽¹²⁾

と評されているように、必ずしも高い評価ではない。しかし、足立雅代氏が指摘する和漢聯句との関わりにおいて、

『真字徒然草』と同時代、もしくは、それ以降に成立した真名本の中には、和漢聯句の影響がみられる真名本は存在しないのである。⁽¹³⁾ (略) 以上のことから、『真字徒然草』は、中世から近世初期にかけての和漢聯句の流行を背景として成立した真名本の中では、その終焉に位置づけられるものと考えられる。⁽¹⁴⁾

と述べられたように、いわば「中世的真名本」から「近世的真名本」へ移行する過程に位置するものと考えられる。さすれば、寛永二十年版本『真名伊勢物語』に見られた漢字本文と付訓のずれが、それ以降に刊行された「総ルビ」の真名本においてどのように展開していくのかを見る際には、第一に扱うべき真名本ということができよう。

以下では、主として片仮名で示された「本文」部分を扱い、そこからうかがえる本資料の特徴を述べていく。なお、『真字寂寞草』には、ノートルダム清心女子大所蔵本のマイクログフィルム⁽¹⁴⁾の焼き付け写真を用いた。

最初に、詳細はここでは省くが、片仮名部分の本文系統は烏丸本を代表とする流布本系統と考えて問題ないと言える（当然ながら、漢字本文も同様に流布本系統と言い得る）。岡西惟中には『徒然草直解』という真名本のスタイルではない徒然草の注釈書も存在する。刊行は貞享三年（一六八六）であって、『真字寂寞草』より三年早く世に出たものである。その本文もまた流布本系統に属すると見られるが、『真字寂寞草』とは若干の違いも存在する（後述）。

『真字寂寞草』の片仮名「本文」において、流布本系統の本文と異なる箇所には、まず漢字本文そのものが文単位で存在しない場合が二箇所ある。烏丸本で示せば次の通りである（以下、『真字寂寞草』や烏丸本の引用に際して、カタカナが『真字寂寞草』の片仮名「本文」を、ひらがなが烏丸本の本文を示す。末尾括弧内の算用数字は章段数を示す。また、必要に応じて新字体に改め、適宜句読点を加えた）。

そらごと、云人もなし。(50)

数行なを不審。数は四五也。鐘四五歩不幾也。たゞ遠く聞ゆる心也。

(238)

いずれにおいても、『徒然草直解』に該当箇所は存在しない。高乗勲『徒然草の研究』によれば、五十段の方は当該の一文を欠く諸本がない。二百三十八段は後人による注記の混入とされる部分であるが、野槌と寿命院抄を除く江戸期の注釈書が欠文としている。五十段については岡西惟中の独自の判断であろうか。しかしながら、流布本系統との大きな違いと言える部分が少ないことは、一般に流布していたであろう徒然草本文を参照すれば事足りたとも言える。

次いで、『真字寂寞草』の片仮名「本文」において、流布本系統の本文と部分的に異なる箇所を示す。

エナラヌニホヒニハコ、ロトキメキスルモノナリ(8)

えならぬにほひには必こゝろときめきする物也

漢字本文は「不敢言馨香爾者心風動鬼也」であり、片仮名「本文」同様、烏丸本の「必（かならず）」に対応する部分を欠いている。

ノウアルヒトモツネヨリハラカシトコソミユレ(15)

能ある人かたちよき人も、常よりハおかしとこそ見ゆれ

右は烏丸本の「かたちよき」に対応する部分を欠くが、漢字本文「有能郭兒毛自常者可咲諸社所見」に対応する片仮名「本文」としては何ら問題はない。

ところが、

ミヤウリヲモトムルニカクノゴトシ(38)

名利の要をもとむるにかくのごとし

では、漢字本文が「要名利如許」となっており、片仮名「本文」との間はずれが生じている。片仮名は「要」字をモトムと訓ませるかたちとなっているが、この漢字と訓の対応関係は慶長十五年版や米沢文庫本の倭玉篇などにも見えるものである。そのために、名詞としての「要（えう）」が脱落したものかもしれない。

カリニモグ^レマナブベカラズ (85)
かりにも賢^レを学べからず

漢字本文は「仮不可学愚」。ただし、ここは烏丸本にある通り「賢を学ぶべからず」とあるべき箇所である。『真字寂寞草』のこの章段の末尾に「偽毛学賢可謂賢（イツハリテモケンヲマナバンヲケントイフベシ）」とあることから、右の箇所は『真字寂寞草』の誤りと見なければならぬ。この時、先に片仮名部分を間違えたとは考えにくい。漢字本文を誤って「愚」としたことだから、それが片仮名「本文」にも反映したものではないか。

その一方、

メデタクアラタメラルベキヨシヲホセラレケルニ (99)
めでたく作り改らるべきよし、仰られけるに

の漢字本文は「可愛可所造革由所仰計累爾」である。片仮名「本文」は漢字本文の「造」字に対応するよみを欠いたかたちとなっている。同様に漢字に対応する片仮名を欠いた例は、「ベツチノコト〔無別事〕(98)」「マモリキケルホドニ〔不目離給来間爾〕(154)」などがある。『徒然草直解』ではいずれの例も、「別の事なし」「まもりぬけるほどに」となっていて、流布本系統と同じである。漢字本文を作成する際には参照した徒然草本文を忠実に反映したが、片仮名を付す際に何らかの事情で抜け落ちたものであろう。

反対に漢字本文にないよみを片仮名「本文」が示していると考えられる例もある。以下では『真字寂寞草』の漢字本文も並べて掲げる。

ヒヤクセンマンノゼニアリトイヘドモ (217)
雖有百万銭
百万の銭ありといふとも

理由は定かでないが、あるいは『真字寂寞草』当時の言語が混入したのか。
さらには、漢字本文を媒介として異文を生じさせたのではないかと考えられる例である。

ヒトツクウシヲバツノヲキリヒトカムムマヲハミ、ヲキリテ (183)
人突牛姑截角人鬻馬姑截耳
人つく牛をバ角をきり、人くふ馬をバ耳をきりて

漢字本文の「鬻」に対応する部分である。『徒然草直解』では「人くふ馬をば」となっていて、『真字寂寞草』と同一ではない。次の例も同様に考えられる。

スコシウケタマハラバヤトイハレケレバ (236)
些将承諾被謂来者
ちと承はらばやといはれければ

『徒然草直解』では「ちと承らばやといはれければ」とあり、「ちと」の右傍らに「少」字が振られている。なお、高乗勲『徒然草の研究』では当該部分に「すこし」という異文は示されていない。

『真字寂寞草』の漢字本文とは直接関わらないが、同じ著者による注釈書である『徒然草直解』とは、右に挙げてきたもの以外にも本文の異同が認められる。もう一例だけ示す。ともに二十二段の、付属語に関わる例である。

イニシヘハクルマモタゲヨ ヒカ、ゲヨトイヒシヲ(22)

往古者車擡世燈挑夜諾謂之乎

いにしへは車もたげよ、火かゝげよとこそいひしを

サイセフコウノゴチャウモントコロナルヲバゴコウノロトイフヲコ

ウロトイフ(22)

最勝講之御聴聞所奈流姑御講廬諾謂乎講廬諾辭

最勝講御聴聞所なるをば、御かうのろとこそいふを、かうろといふ

係助詞「コソ」は、『真字寂寞草』の漢字本文において「社」で表されることが多いが、漢字表記に逐一改められるわけではない。右の箇所は「社」字を用いなかったために、片仮名部分で「コソ」を補うことをしなかったのではないかと考えられる。「社」や「許會」に直された章段では当然ながら「コソ」を片仮名で添えている。

このほかにも、『真字寂寞草』の片仮名「本文」を烏丸本と対照させた場合に目立つのは、音読するか訓読するかの違いである。ただ、これは現行注釈書等のよみが『真字寂寞草』のそれと異なることをも示して

いるため、簡単には片付けられない。江戸時代前期の徒然草注釈書でのよみの扱いを視野に入れつつ検討しなければならない。

四 おわりに

以上、雑漢としながらも、片仮名の部分を手がかりとして『真字寂寞草』について述べ来たことは、真名本においては漢字本文が基本であり、仮名の部分は漢字本文に基本的には沿いつつも、時折はそれから離れて存在するものである、ということである。そして、それ故に仮名の部分は、真名本がもつ「仮名↓漢字」という図式にさらに「↓仮名」という要素を加えたことにより、独自の異文を生じさせることもあったということである。その点では、『真字寂寞草』の片仮名は、ひとまずは徒然草の本文ということができようが、それはあくまで基本的な性格としての謂であって、真名本としての漢字本文にもとづく独自の強いよみを示している箇所も含まれていると考えられるのである。そうなるのと、仮名の部分はやはり鉤括弧付きの本文と言わざるを得ない。仮名の部分は仮名の部分として、漢字本文とはまず分けて検討しなければならぬと考える所以である。

最後に少しく臆測を加えると、寛永二十年版本『真名伊勢物語』において、漢字本文に直接関わらないかたちで仮名が「総ルビ」形式で加えられるまでは、あるいは漢字本文のみで『伊勢物語』の本文として通用していたのかもしれない。そして、それがともあれ漢字本文に仮名を加えるかたちとなった段階から、真名本には仮名を添えるという認識が生じ、以降に引き継がれていった、という想定はあながち不可能ではないと考える。

いずれにせよ、真名本の成立のさまを明らかにするには、それを支える漢字使用基盤とでもいふべき識字のありようの解明が必要である。そのため、まずは真名本そのものが解明の手がかりを与えてくれる有力な資料であると考ええる。真名本それぞれの文字使用の様相は単純ではないだろうが、個々の真名本における用字法の記述を通して明らかにしたいと考えている。

註

- (1) 江戸時代には賀茂真淵や今井似閑など、明治期以降では池上禎造氏や山田俊雄氏など。
- (2) 『国語学大辞典』(昭和五十五年九月、東京堂出版)の「真名本」の項。執筆は山田俊雄氏。
- (3) 註(2)に同じ。
- (4) 『日本国語大辞典』第二版には、「まなぼん(真名本)」の項には明治期の『風俗画報』の用例が、「まながき(真名書)」の項には桃源瑞仙『日本書紀桃源抄』の用例が掲げられている。
- (5) 註(2)に同じ。
- (6) 池上禎造「真名本の背後」(『国語国文』第十七巻四号、昭和二十三年六月)。
- (7) 足立雅代「真名本と和漢聯句——『真字寂寞草』の場合——」(『国語国文』第五十八巻四号、平成元年四月)。
- (8) 写本の真名本も見られるが、少なくとも『国書総目録』に掲載されている範囲では少数に留まるようである。
- (9) この点において、池田亀鑑『伊勢物語に就きての研究 校本篇』の真名本系統の校本において、漢字本文のみを校異の対象としていることは当然の帰結と言える。
- (10) 「寛永二十年板真名伊勢物語の本文の性格及び変字法に就いて」(高橋忠彦・高橋久子編『真名本伊勢物語 本文と索引』(平成十二年三月、新典社)所収)
- (11) 註(2)に同じ。「真名本特有のスタイルが求められるものではなく、正しい漢文に近いもの、変体漢文、それに万葉仮名を交えるもの、万葉仮名を主にするものなど多様である。」を敷衍すればこうなるであろうと言ふほどの意味である。同様の趣旨の言及は、同氏の「真名本の位置」(『国語と国文学』第三十四巻十号、昭和三十三年十月)において、幸田露伴の言を引用しながら述べているくだりにも見られると考え

- る。
- (12) 雲英末雄「深江屋太郎兵衛の出版活動」(『江戸文学』十五号、平成八年五月)
- (13) 註(7)に同じ。
- (14) 国文学研究資料館の日本古典籍総合目録データベースによる。

主要参考文献

- 池田亀鑑『伊勢物語に就きての研究 校本篇』(昭和三十三年三月、有精堂)
 大津有一『伊勢物語に就きての研究 補遺篇・索引篇・図録篇』(昭和三十六年十二月、有精堂)
 時枝誠記編『徒然草総索引改訂版』(昭和四十二年二月、至文堂)
 高乗勲『徒然草の研究』(昭和四十三年三月、自治日報社)
 高橋忠彦・高橋久子編『真名本伊勢物語 本文と索引』(平成十二年三月、新典社)
 佐藤喜代治編『漢字百科大事典』(平成八年一月、明治書院)
 足立雅代「真名本と和漢聯句——『真字寂寞草』の場合——」(『国語国文』第五十八巻四号、平成元年四月)
 池田恵美子「翻刻——『真字徒然草』(一)」(『中央大学附属高等学校紀要』第十三号、平成十一年十二月)
 池田恵美子「翻刻——『真字徒然草』(二)」(『中央大学附属高等学校紀要』第十六号、平成十四年十二月)